

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00232

研究課題名（和文）地域連携による触覚鑑賞ツールについての調査・開発研究

研究課題名（英文）Investigation and development research on tactile art tools in Yamanashi.

研究代表者

武末 裕子 (TAKESUE, Hiroko)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：10636145

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は地域連携から世界水準の美術鑑賞ツール開発と触覚による鑑賞法の可能性を明らかにすることを目的とした。

アンテロス美術館と共同開発したツールは山梨県立美術館に常設設置して活用につとめ、ボランティア研修をし、普及に至った。またイタリア（アンテロス、オメロ、ヴァチカン美術館）、日本（兵庫県立美術館・国立民族学博物館・京都国立美術館）事例、活用法については報告書にまとめた。加えて鑑賞方法実践は、県立盲学校や国内外彫刻家、大学の協力で県立図書館（2018-22年）や台湾（2021-22年）で展覧会等を開催し、フィードバックと普及に努めた。感染症の中でも、理論と実践の往還となる研究成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アンテロス美術館と共同開発したツールは世界的インクルーシブな取り組みであり、日本では初の公立館教材設置となった。開発後は山梨県立美術館主催のボランティア研修を実施し、研究期間内に常設設置にまで至ったことは大きな成果である。また、活用に至ったことで報告書にまとめたイタリア（アンテロス、オメロ、ヴァチカン美術館）、日本（兵庫県立美術館・国立民族学博物館・京都国立美術館）事例活用法も論理的裏付けとして学術的にも貴重な資料となった。

新型コロナ感染症の対策と並行し、アジア圏の台湾（2021-22年）研究発表により、実際に国内外の視覚障害者美術鑑賞実践へつなげた点は社会的に意義のある取り組みといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a world-class art appreciation tool through regional cooperation and to explore the potential of tactile methods of appreciation.

The tool, developed in collaboration with the Anteros Tactile Museum, was permanently installed at the Yamanashi Prefectural Museum of Art. Volunteer training was provided to ensure its appropriate use. The report also provides examples of viewing tools used in Italy and Japan, and how they are used. In addition, various activities were conducted to promote the practice of appreciation methods.

Exhibitions and other events were held at the Yamanashi Prefectural Library (2018-22) and in Taiwan (2021-22) in collaboration with the prefectural school for the visually impaired, domestic and foreign sculptors, and universities. Efforts were made to gather feedback and disseminate the results. In spite of the challenges posed by the pandemic, the research findings exemplified an iterative process of theory and practice.

研究分野：彫刻・美術教育

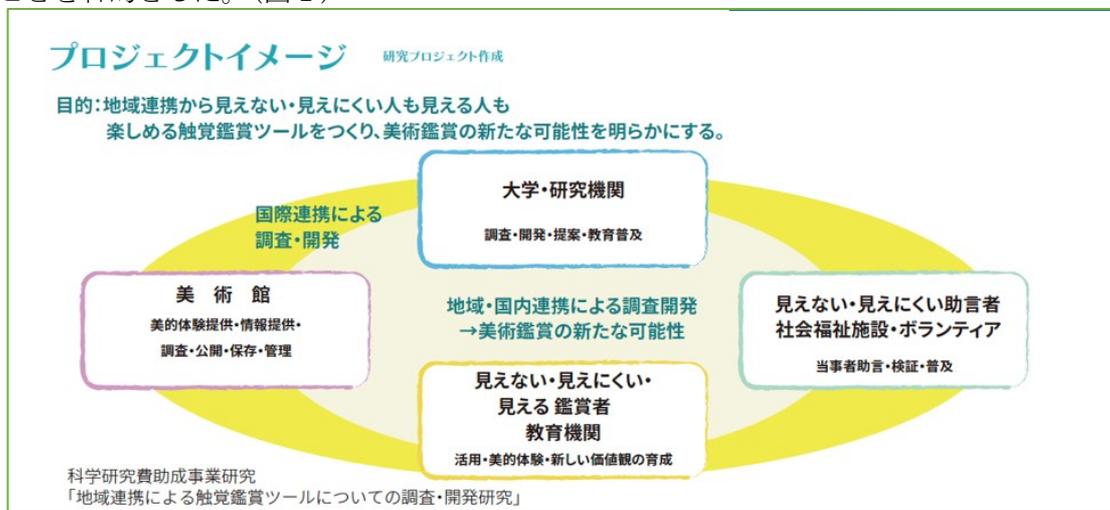
キーワード：彫刻 触覚美術鑑賞 美術教育 鑑賞教育 インクルーシブ 視覚障害者の美術鑑賞 アンテロス美術館 オメロ美術館

1. 研究開始当初の背景

「感性を豊か」にする美術における身体感覚は「視覚」の果たす役割が大きいと長年思われてきた。しかし近年、インクルーシブ教育と鑑賞教育の高まりから美術鑑賞において「視覚」以外の身体感覚の研究が深まりつつある。そのような中で本研究では国内外の触覚による美術鑑賞の実践事例を調査し、国内外の大学・美術館と連携をはかりながら地域を軸とした世界水準の美術鑑賞ツール開発を行い、理論と実践の相互から触れる美術鑑賞法の新たな可能性を明らかにしたいと考えた。研究開始当初そうしたツール開発と実践を組み合わせる研究は他にない状況であった。最終的に開発したツールは美術館や教育現場で随時活用し改良を重ねて更なる普及につとめることを当初より予定して研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では国内外における触覚による鑑賞の実践事例を調査し、大学間・美術館と地域連携をはかりながら地域を軸とした世界水準の美術鑑賞ツールの開発と鑑賞法の提案を公共の場で行い、理論と実践の相互から、触れる美術鑑賞法の新たな可能性を明らかにすることを目的とした。(図1)



(図1) 目的とプロジェクトイメージ

3. 研究の方法

研究課題 A (調査・分析 (図2・3)) の後に研究課題 B (実践 (図4))、検証 C (検証・普及) を順次行った。調査・分析、実践、検証・普及と次の課題へと反映させた。いずれも共に研究してきた大学や県内盲学校、美術館に協力を仰ぎながら進めた。特に、初年度の研究課題 B で作成した教材を実際に視覚障害のある様々な症状 (先天性・中途失明・全盲・弱視 他) のアドバイザーに検証 C で触れてもらい、意見を集約し反映させる協力体制を構築、次年度の研究課題 A に反映させて次年度の研究課題 B にツールの更なる修正を作成して提示した。研究課題 A として、国内外の美術館での触覚教育普及の事例を調査・分析 (日・伊の美術館) をおこなった。日本国内・県内の美術館調査、イタリアの美術館調査 (アンテロス美術館 (ポローニャ)・オメロ美術館 (アンコーナー)・ヴァチカン美術館・ドゥオーモ美術館他) の調査は研究代表者 (山梨大学准教授武末裕子) が担当し、分担者 (山梨県立大学准教授 古屋祥子・星見学園短期大学 客員研究員大内 進) が国内事例 (兵庫県立美術館・国立民族学博物館・京都国立美術館 他) を分担して調査した。



(図2) オメロ美術館講演



(図3) アンテロス美術館調査



(図4) 画題・構図の実践検証

また、並行し、研究課題Bは、地域独自の触覚鑑賞ツール作成（3D レリーフ・鑑賞作品）実践として、触覚鑑賞効果のある素材や形の選定・彫刻技法による原型作成・補助ツールの作成をおこなった。上記ツール作成は、イタリアのアンテロス美術館との共同研究で実現し、日本の山梨県立美術館に絵画情報提供協力を得た。制作した教材の分析・反映の研究課題Bではツール修正・提示をおこない、各年度秋に一般公開や研修のための講演会を行った。

2021-22年度は検証Cとして研究課題ABのまとめ検証・普及を新型コロナウイルス感染症の対応策を講じながら実施した。また、山梨県立美術館では鑑賞ツールの活用に至るまでの解説ボランティア研修等も含めて実施し、フルインクルーシブの先進国であるイタリアの美術館学芸員と鑑賞ツール作成スタッフとオンラインで繋ぎながら報告・助言頂き、報告書にまとめて公開・活用につとめた。

4. 研究成果



(図5) 展示の様子

(1) 国内美術館・博物館での取り組み調査

研究分担者の古屋は国内美術館・博物館の触覚鑑賞教育普及の事例調査を担当した。研究開始時点で美術作品の触覚鑑賞やさわることのできる資料展示などの取り組みは増加傾向であり、全国に広がっている状況であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延を受けて「さわる」をキーワードにしたこれらの取り組みは特に大きな影響を受けたと言え、関係者はその対応に迫られてきた。このような近年の状況も踏まえながら、触覚をキーワードに展開している美術館・博物館における取り組みについて、国内の実践事例を収集し、報告書冊子には国立民族学博物館(図5)、京都国立近代美術館、兵庫県立美術館、長野県立美術館、ヴァンジ彫刻庭園美術館、山梨県立美術館、南山大学人類学博物館、神奈川県立近代美術館鎌倉分館、アンテロス美術館東京分館、六甲山の上美術館さわるみゅーじあむの10施設の報告をまとめた。

手でふれながら鑑賞するなどの触覚に着目した美術鑑賞の方法は、日本においても全国で広がりつつあると言え、それぞれにキャプションやディスプレイの工夫など、ユニバーサル対応を実施していることが今回の調査で明らかになった。また、国内の触覚教育に関連する研究会へ参加する中でも、ビジュアルにだけ頼るのではない美術のあり方や美術鑑賞の考え方に注目し、それぞれの活動場所で実施する人材が増えていることを感じる。研究期間中、新型コロナウイルス感染症の影響で、増加傾向だった企画も実施がままならない状況となり、一時的に停滞したことは確かであるが、コロナ禍には対応策を携えて活動が再開されていると言える。これは、長い自粛期間や非接触が推奨される社会生活の中で、人々がさわることの大切さを改めて認識する機

会となり、その重要性を発信する活動の意義が明らかになったことを示すのかもしれない。

また、展覧会開催などの他に、シンポジウムや講演会などの企画も重要な教育普及活動であり、全国各地で様々な取り組みがある。コロナ禍で普及したもののひとつに、オンラインによる人々の集いが挙げられるが、視覚障害教育のイベントや各団体の勉強会もオンラインで開催されるものが増え、参加しやすい環境整備が進んだとも言える。対面でのコミュニケーションに劣る点は多くあるが、対面が叶わない状況での関わり方として有効であり、海外などの遠方と手軽につながることができるのもメリットである。対面での対話や直接作品に触れる機会と合わせて有効に活用することで、より深い美術鑑賞のあり方や教育普及の浸透につながるのではないかと期待される。

(2) 地域連携による触覚鑑賞ツールについて現状を踏まえた教育現場への普及と課題

研究分担者の大内は、「手と目でみる教材ライブラリー」を運営し、イタリアのアンテロス美術館と連携して「手でみる絵画」を展示している。盲学校高等部の生徒を対象に、校外学習の一環として「モナリザ」と「神奈川沖浪裏」の2点を鑑賞した。その盲学校生徒の感想などから、現状の学校における鑑賞教育の可能性と地域連携による取り組みの重要性が示唆された。

①鑑賞教育の可能性

事例で報告した生徒の感想から、視覚障害生徒の絵画への潜在的関心が高いにもかかわらず、視覚障害教育の義務教育段階で絵画鑑賞の取り組みが十分になされてきていないことが

示された。近年、視覚障害者の絵画鑑賞の機運が高まってきているわけであるが、その方法は大きく言語活動をメインとするものと触覚活用を重視するものに二分される。しかし、この両者は相反するものではない。とくに学校教育では、社会生活の基盤となる基礎・基本を培うことが大切であり、視覚に障害があっても絵画に関する基礎知識を習得させる必要がある。そのためには、学校教育段階では児童生徒の保有するあらゆる感覚を活用した活動が効果的であり、最も有効な感覚の一つである触覚を無視することはできない。この感想からは、半立体的翻案作品によって触覚による絵画作品のイメージがとらえやすくなること、絵画への興味関心を高める効果があることなどが確認できた。視覚障害者の絵画鑑賞の様々な方法に対立的にとらえるのではなく、言語活動や触覚など様々な方法のメリットを活かした鑑賞法を確立して視覚障害児童生徒のニーズに応えていきたいものである。

②地域連携への期待

視覚障害者の絵画鑑賞にあたっては、様々なツールが必要となる。こうしたツールを特別支援学校が整備し保持することは、人的にも財政的にも困難が伴う。国連の障害者の権利に関する条約の批准や障害者差別禁止法の施行などをきっかけとして、国内の美術館の視覚障害者への対応についての関心が高まってきている。そうした取り組みの一つとして、対話型鑑賞が積極的に行われている。人的物的資源の制約から最も取り組みやすく効果的であるのが、物的なツールを必要としないこうした方法だといえる。

しかし、様々なタイプ、年齢の鑑賞者に対応していくためには、実感が持てるさまざまな補助教材とスタッフの専門性が不可欠である。触覚が活用できるツールもそうした補助教材の一つである。こうした人的物的資源の整備は担当部署や担当スタッフの努力だけでは限界があり、組織的な対応が不可欠である。

本研究期間中に大内はイタリアの障害者のアクセシビリティについてドラスティックな変革を遂げたウフィッツィ美術館の取り組みについてインタビュー調査を行った。そこで判明したのは、館長によるアクセシビリティ対応へのマネジメントであった。館長直轄のアクセシビリティ部門を設け、マンネリ化した障害者対応からの脱却を図ったのである。ウフィッツィ美術館では、予約なしに視覚障害者の来館に対応し、館内の約30点の彫刻作品は点字解説が付き、触って鑑賞することができる。希望があれば、できる限り展示作品の触覚による鑑賞にも応ずるようになってきている。著名な「ヴィーナスの誕生」の作品に並んで、視覚障害者のための半立体翻案作品も展示されていた（大内進、茂木一司 ウフィッツィ美術館における視覚障害者対応の改革, 第28回視覚障害リハビリテーション研究大会, P-研-27, 2018）。

近年、我が国でも長野県立美術館が組織的に視覚障害対応を行ったが、触覚鑑賞ツールも含めて人的物的資源を充実させるための取り組みが組織的に展開され、学校教育を支援していくことを期待したい。

(3) 触覚鑑賞ツール開発・活用と海外取り組み調査について

本研究は実施途中、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い美術館での活用が数回見送られ延期されたが最終年度に常時活用に至ったため、見えない・見えにくい鑑賞者から教材の有効性や解説の手法手順の重要性についての意見を検証等で集約することができた。

特に中途失明の鑑賞者からは、視覚利用している鑑賞者と共有できる鑑賞ツールの設置はアクセシビリティを高める意味でも大変有効であるとの当事者意見があった。

鑑賞時には更に踏み込んで、描かれている詳細を触覚段階に応じてガイド役が口頭で伝え、描かれている文化的背景や示唆する画題にまで鑑賞が及ぶことがイタリアと日本で開催した検証から示された（図6）。

鑑賞者に応じて自分のペースで鑑賞を進められるように、イタリアでの解説を日本で再度整理し、鑑賞パネルを作成、QRコードやユニボイスで情報を提示した（図7）。また、見える鑑賞者と見えない・見えにくい鑑賞者の共通の画題認識が生まれることで対話型の鑑賞や身体感覚を利用した鑑賞に及び、発展的展開につながっている様子が多く見られた。

感染症対策についても2021年度から専門家である山梨県立大学看護学部平尾百合子教授の協力を得て、流行しているウィルスタイプに合わせた感染対策を踏まえて実施し、理論と実践が一体とな



(図6) 日本での検証 (図7) 山梨県立美術館設置

る研究成果を得ることができた。

また、本研究では上記と並行し、年度ごとの公開に合わせ、視覚に障害のある人もない人も楽しめる教材を公開する展覧会（図8・9）と講演・レクチャー・ワークショップ（図10・11）を実施してきた。運営は大学生が主体となり、公共施設や盲学校、地元視覚障害者団体に協力を仰ぎながら鑑賞の手法についての調査・実践を行ってきたものである。2018年度からは毎年山梨県立美術館や図書館で開催し（2020年度はコロナのため延期）、2021・2022年度はイタリアの「さわる絵本」も題材として調査し、アジア圏では国立台湾芸術大学や大葉大学・国立中興大学等の協力で台湾内で展覧会巡回、イタリア・台湾の触覚鑑賞の広がりについても相互に学び深め合うことができた。また、イタリアの美術館（アンテロス美術館（ボローニャ）・オメロ美術館（アンコーナー）・ヴァチカン美術館・ドゥオーモ美術館他）の調査事例については別冊の報告書冊子に詳細を記すことができた。

以上のことから、鑑賞のためのツール作成だけでなく、国内外の事例調査、鑑賞に至るまでの過程やその手法研究、見えない・見えにくい人も含めた造形実践を相互に続けることで、触覚による表現と鑑賞の可能性を深めて実証を果たした。



（図8）触察教材

（図9）ふれる絵本展示

（図10・11）盲学校児童ワークショップ

○研究協力機関

・アンテロス美術館（イタリア）Anteros Tactile Museum

<https://www.cavazza.it/drupal/?q=it/node/315>

ロレッタ・セッキ（キュレーター・館長）、パオロ・グアランディ（彫刻家）、ステューファノ・マンゾッティ（彫刻家）、エンリコ・スキッル（彫刻家）、ミケーレ・ピッコロ（美術館ガイド）、マッテオ・ステューファニ（ボランティア触察ガイド）、ルカ・トルレンテ（動画撮影・編集）

・オメロ美術館（イタリア）State Tactile Museum Omero

<https://www.museoomero.it/>

アルド・グラッシーニ（発案者・美術館委員代表）、アナリザ・トラサッティ（教育担当職員）、マヌエラ・アレッサンドリーニ（教育担当職員）

山梨県立美術館、山梨県立図書館、社会福祉法人山梨ライトハウス、山梨県立盲学校、ヴァチカン美術館（イタリア）、ドゥオーモ美術館（イタリア）、エイドス美術館（イタリア）、国立台湾芸術大学（台湾）、大葉大学（台湾）、国立中興大学（台湾）、山梨県産業技術センター、山梨大学工学部附属ものづくり教育実践センター、国立民族学博物館、京都国立近代美術館、兵庫県立美術館、長野県立美術館、ヴァンジ彫刻庭園美術館、山梨県立美術館、南山大学人類学博物館、神奈川県立近代美術館鎌倉分館、アンテロス美術館東京分館、六甲山の上美術館さわるみゅーじあむ、イタリア全国視覚障がい者支援施設連盟 他

○研究協力（個人）

平尾百合子（山梨大学看護学部 教授）、芝田典子（山梨大学教育学部 非常勤講師）、頼永興（国立台湾芸術大学 教授）、吉田敦（大葉大学 教授）、森泉文美（美術史家・絵本コーディネーター・通訳）、フランチェスカ・レアーレ（通訳・翻訳）、検証助言協力皆様

○備考 HP・インターネットによる研修成果のメディア取材資料 成果等

・手でもみるプロジェクト 彫刻の視点から、触れて鑑賞してみる取り組みについて

<https://art-edu.sub.jp/01/>

・山梨県立美術館 HP「種をまく人」レリーフ版

<https://www.art-museum.pref.yamanashi.jp/exhibition/2023/994.html>

・NHK ニュース 2022年9月29日 触って楽しむミレーの「種をまく人」 鑑賞方法を学ぶ研修会 <https://www3.nhk.or.jp/lnews/kofu/20220930/1040018221.html>

・NHK ニュース 2022年10月21日 「作品に手で触れて楽しむ展覧会甲府山梨県立図書館」 <https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20221021/1000086065.html>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 大内進	4. 巻 第18号
2. 論文標題 イタリアにおける 2019-2020 学校年度のインクルーシブ教育の動向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日伊総合研究所所報	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 武末裕子・古屋祥子	4. 巻 26
2. 論文標題 粘土による造形活動の有効性について：『手でみる彫刻展』ワークショップおよび幼児・児童造形事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34429/00004935	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 茂木一司・多胡宏・大内進	4. 巻 55号
2. 論文標題 インクルーシブ教育時代の視覚障害アート教育をどうしたらいいのか - 見える / 見えない / 見えにくいを越境する教材開発を目指して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編	6. 最初と最後の頁 11-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 TOYODA Wataru・MIYAMOTO Ryo・OOUCHI Susumu・INOUE Takenobu	4. 巻 114(3)
2. 論文標題 Discriminable Height Differences of Raised Lines	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Visual Impairment & Blindness (JVIB)	6. 最初と最後の頁 198-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0145482X20925213	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 TOYODA Wataru・TANI Eiji・OOUCH Susumu・OGATA Masaki	4. 巻 88
2. 論文標題 Effects of environmental explanation using three-dimensional tactile maps for orientation and mobility training	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Applied Ergonomics	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武末裕子	4. 巻 第52号
2. 論文標題 触覚と彫刻の関係性について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学美術教育学会研究	6. 最初と最後の頁 225-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19008/uaesj.52.225	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺哲也・大内 進	4. 巻 Vol.57(2)
2. 論文標題 視覚障害教育における3Dプリンタ活用状況調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 弱視教育	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武末裕子	4. 巻 1
2. 論文標題 地域アートマネジメントにおけるアウトリーチ・ワークショップ『手でみる新しい絵画』をつくろう	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 芸術文化推進委員会文化庁助成《平成30年度文化庁大学を活用した文化芸術推進事業》『山梨から放て！芸術文化の昇華2018』報告書	6. 最初と最後の頁 28-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武末裕子	4. 巻 29
2. 論文標題 「ジャコモ・マンズー作品における触覚感覚をいかした彫刻表現について(1)」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 71 - 78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大内 進	4. 巻 Vol.39
2. 論文標題 「手と目でみる教材ライブラリー」の紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 視覚障害教育ブックレット	6. 最初と最後の頁 8-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件(うち招待講演 1件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 大内進
2. 発表標題 イタリアにおける 2019-2020 学校年度のインクルーシブ教育の動向
3. 学会等名 第 18 回日伊総合研究所研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大内進
2. 発表標題 視覚障害分野での3Dプリンター活用の動向
3. 学会等名 視覚障害リハビリテーション協会研究発表大会 in 岡山
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Loretta Secchi, Paolo Gualandi, Stefano Manzotti, Michele Piccolo, Matteo Stefani, 森泉文美, 武末裕子
2. 発表標題 レクチャー 触れる絵画 鑑賞 イタリアのふれて鑑賞できる美術館からのメッセージ
3. 学会等名 手でみるプロジェクト2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 頼永興, 芝田典子, 呂文, 陳凱智, 武末裕子, 古屋祥子
2. 発表標題 ふれてみる展覧会 出品者解説 台湾から
3. 学会等名 手でみるプロジェクト2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森泉文美, 武末裕子
2. 発表標題 ふれてみる絵本の魅力 イタリアから
3. 学会等名 手でみるプロジェクト2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯島徹、若井広太郎、根岸由香、藤島瑠利子、大内進、長崎勤、直江俊雄
2. 発表標題 知的障害特別支援学校幼稚部における本人の願いを取り入れた教材教具の効果と授業実践 - 行動要素一覧を基にした個別の指導計画の目標設定と評価 -
3. 学会等名 日本特殊教育学会 第58回大会 (2020福岡大会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若井広太郎、秋山篤、大内進、中村里津子、根岸由香、藤島瑠利子、真鍋健、山田毅
2. 発表標題 特別支援学校のセンター的機能の評価に関する研究 - インタビュー調査に基づくグッドプラクティスの検討 -
3. 学会等名 日本特殊教育学会 第58回大会 (2020福岡大会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武末裕子
2. 発表標題 作品「森で 2019」(ブロンズ・大理石・楠)を展示
3. 学会等名 国画会 「国展秋季展」 東京都美術館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武末裕子
2. 発表標題 作品「とり」「うすらい(薄氷)」(ブロンズ・大理石・陶・ガラス)
3. 学会等名 「触れる美術展2019」 長野県立信濃美術館学芸企画室依頼 ギャラリー八十二(長野市)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武末裕子
2. 発表標題 作品「森へ 2019」(ブロンズ・楠)を展示
3. 学会等名 「手でみる美術展2019」 山梨県立図書館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古屋祥子、石川智弥
2. 発表標題 作品「耳の時代」(樟・樹脂)
3. 学会等名 「手でみる美術展2019」 山梨県立図書館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武末裕子 古屋祥子
2. 発表標題 レクチャー「触れる美術鑑賞 国内外の事例から」
3. 学会等名 手でみる美術展2019 山梨県立図書館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大内 進
2. 発表標題 3Dプリンターを活用した触覚教材製作の現状と課題
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会自主シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大内 進
2. 発表標題 イタリアにおけるフルインクルーシブ教育の推進と現状
3. 学会等名 星美学園短期大学日伊総合研究所研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大内 進、茂木一司
2. 発表標題 ウフィッツィ美術館における視覚障害者対応の改革取組
3. 学会等名 第28回 視覚障害リハビリテーション研究発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大内 進
2. 発表標題 視覚障害者の絵画へのアクセス
3. 学会等名 第69回色彩研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川智弥、古屋祥子、岡本明
2. 発表標題 視覚障害者のための古典彫刻作品の鑑賞支援 ミロのビーナス像を題材とした試み
3. 学会等名 ヒューマンインタフェースシンポジウム2019 対話発表 同志社大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大内 進、大内紀彦、藤原紀子
2. 発表標題 イタリアにおける視覚障害者の美術鑑賞への取組
3. 学会等名 第27回 視覚障害リハビリテーション研究発表大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大内 進
2. 発表標題 手でみる絵画触察のための基礎知識
3. 学会等名 第41回美術科教育学会北海道大会インクルーシブ研究会2019
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 武末裕子, 古屋祥子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山梨大学教育学部 武末研究室、山梨県立大学 人間福祉学部 古屋研究室	5. 総ページ数 36
3. 書名 鑑賞会・ワークショップ・講演 『手でみるプロジェクト2021』報告書	

1. 著者名 香川邦生, 大内進 編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版株式会社	5. 総ページ数 264
3. 書名 インクルーシブ教育を支えるセンター的機能の充実:特別支援学校と小・中学校等との連携	

1. 著者名 茂木 一司(代表), 大内 進, 多胡 宏, 広瀬 浩二郎 編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ジアース教育新社	5. 総ページ数 376
3. 書名 視覚障害のためのインクルーシブアート学習 - 基礎理論と開発	

1. 著者名 武末裕子, 古屋祥子, アルド・グラッシーニ, アナリザ・トラサッティ 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山梨大学	5. 総ページ数 60
3. 書名 手でみるプロジェクト2018 芸術文化推進委員会文化庁助成《平成30年度文化庁大学を活用した文化芸術推進事業》	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>・手でみるプロジェクト 彫刻の視点から、触れて鑑賞してみる取り組みについて https://art-edu.sub.jp/01/ ・山梨県立美術館HP「種をまく人」レリーフ版 https://www.art-museum.pref.yamanashi.jp/exhibition/2023/994.html ・NHKニュース 2022年9月29日 触って楽しむミレーの「種をまく人」鑑賞方法を学ぶ研修会 https://www3.nhk.or.jp/news/kofu/20220930/1040018221.html ・NHKニュース 2022年10月21日「作品に手で触れて楽しむ展覧会甲府山梨県立図書館」 https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20221021/1000086065.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大内 進 (OOUCHI Susumu) (40321591)	星見学園短期大学・日伊総合研究所・客員研究員 (42632)	2020年度まで 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 特別研究員
研究分担者	古屋 祥子 (FURIYA Shoko) (50557824)	山梨県立大学・人間福祉学部・准教授 (23503)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 手でみるプロジェクト	開催年 2021年～2022年
----------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	台湾国立芸術大学	板橋435藝文特區	大葉大学	他1機関
イタリア	Anteros Tactile Museum(アンテロス美術館)	State Tactile Museum Omero (国立オメロ美術館)	Vatican Museum (ヴァチカン美術館)	他3機関